

## 日本サウンドスケープ協会 2018 年度春季研究発表会プログラム

### ○開催概要

- ・日時：2018 年 5 月 20 日（日）9:15～13:00（※変更しました）
- ・会場：同志社大学良心館 RY105 教室  
京都市上京区今出川通烏丸東入地下  
地下鉄烏丸線「今出川」駅徒歩 1 分
- ・主催：日本サウンドスケープ協会
- ・資料代：会員 無料，一般 1000 円，学生 500 円

### ○プログラム

9:15 開会・趣旨説明

#### <第 1 セッション>

9:20 第 1 報告 [発表形式 A] (発表 20 分+質疑・交代 5 分)

宮津・竹の学校の活動と音感性

報告者：曾和治好 (NPO 法人地球デザインスクール)

9:45 第 2 報告 [発表形式 A] (発表 20 分+質疑・交代 5 分)

ミュージアム・コンサートで聴くサウンドスケープ—西宮市貝類館での実践報告

報告者：松本玲子 (青山学院大学総合文化政策学研究所)

10:10 第 3 報告 [発表形式 A] (発表 20 分+質疑・交代 5 分)

金沢市寺町寺院群地域における音環境認知の経時比較

報告者：土田義郎 (金沢工業大学)

10:35 第 4 報告 [ショートトーク] (発表 5 分)

都市を読む行為としてのサウンドスケープ・プロジェクト事例紹介

報告者：鷺野宏 (都市楽師プロジェクト)

10:40 質疑応答 (15 分)

10:55 休憩 (10 分)

#### <第 2 セッション>

11:05 第 5 報告 [発表形式 A] (発表 20 分+質疑・交代 5 分)

携帯型音楽プレイヤーの使用実態と「気づきのデザイン」の効果

報告者：鶴田(濱村) 真理子 (宇都宮大学)

11:30 第 6 報告 [発表形式 A] (発表 20 分+質疑・交代 5 分)

小学校 2 年生の音探し 教科教育とインクルーシブ教育への可能性

報告者：鈴木秀樹・佐藤牧子 (東京学芸大学附属小金井小学校)

11:55 第 7 報告 [発表形式 B] (発表 35 分+質疑・交代 5 分)

「うみなりとなり」の制作からみるフィールド録音の可能性

報告者：柳沢英輔 (同志社大学文化情報学部)・岩田茉莉江 (音風景研究家)

12:35 質疑応答・総合討論 (25 分)

13:00 終了

## ○報告要旨

### ◇第1報告

#### 宮津・竹の学校の活動と音感性

報告者：曾和治好（NPO 法人地球デザインスクール）

NPO 法人地球デザインスクールは、2013 年より宮津市や大学・市民と協働し、竹林再生をキーワードに宮津・竹の学校事業を推進してきた。さらにイタリアやアフリカのアーティストを招いたアート・ワークショップの開催や、世界竹会議での成果発表など、広い視野から地域の緑地景観再生に取り組んできた。竹野学校の諸活動の中でも、特に五感に着目し、地域ならではの料理の味覚や、サウンドスケープに関する活動なども重視している。

放置竹林の竹穂を利用した「手ぼうきづくりワークショップでは、京都の庭師が利用する小さな竹ぼうきを自作するとともに、京都の庭園の掃除技術の芸術性にも言及し、その中で音にまで配慮した庭師の感性の重要性を指摘する。

また、橋立風鈴づくりワークショップでは、宮津の竹を使用した風鈴のデザインに取り組み、商店街との協同のうえで、音に特徴のある、宮津の新たな商品開発への展開を目指している。さらに、宮津の環境音の採取などを通じた、環境音楽の創造や、天橋立の景観整備への提言など、様々な活動が展開されている。

里山再生、景観保全のための教育的な活動においても、サウンドスケープの思想を導入し、時間的概念や感覚的共感を得ることにより、プロジェクトの推進力を強めることができ、さらに多様な人々の参画にもつながることが分かりつつある。

このように、ランドスケープデザインや環境デザイン、建築、景観、風致など我々の生活環境を保全し、創造する分野においてもサウンドスケープ概念を導入することにより、従来の概念では達成できなかった、大きな成果を期待することができる。

### ◇第2報告

#### ミュージアム・コンサートで聴くサウンドスケープ—西宮市貝類館での実践報告

報告者：松本玲子（青山学院大学総合文化政策学研究所）

筆者はミュージアム・コンサートでの演奏を重ねるうちに、音楽で博物館のサウンドスケープを聴くことができるのではかと思えるようになった。そこで本発表では 2017 年におこなった西宮市貝類館でのミュージアム・コンサートにおいて試みた「地域を聴く」実践について報告する。

西宮市貝類館は兵庫県西宮市の港湾内造成地にあり、世界の貝や関連資料を展示する博物館である。市の環境学習の拠点施設として、2017 年のリニューアル事業に際しても「地域」がテーマとなった。そこで筆者はリニューアル記念として開催されるミュージアム・コンサートにおいては、「地域を聴く」実践にしたいと考えた。

そこでまず「館内コンサート」では展示の貝類に関する楽曲に加えて、地域の民話を基にした「音楽と語り」や地域のメロディである「酒造り唄」をモチーフにした楽曲制作をおこなった。また地域ゆかりのヨットが展示され、空や周囲からの音も聞こえる「中庭」で演奏することにより、館とその背景に広がる地域を聴こうとした。

さらに館内コンサートの後は館外に出てサウンドウォークと野外ミニライブをおこなった。公園を歩き、ヨットハーバーでのミニライブを体験することで周辺環境に耳を澄まそうとしたのである。

ミュージアム・コンサートは音楽ホールから博物館への単なる「場の移動」を超えて、館や周辺地域の環境・歴史を聴く装置として機能できるのではないか。貝類館の実践はコンサートで博物館のサウンドスケープを聴こうとする実践において、「地域を聴く」ことを試みたものである。

#### ◇第3報告

金沢市寺町寺院群地域における音環境認知の経時比較

報告者：土田義郎（金沢工業大学）

金沢市の寺町寺院群は、平成8（1996）年に環境省（当時は環境庁）の『残したい“日本の音風景100選”』の一つとして選定された。住職が撞く鐘以外にも、毎週土曜夕方6時に地域住民の有志の方による“鐘音(しょうおん)愛好会”というボランティア団体がいくつかの寺院で鐘を撞くことからその価値が認められた。選定から6年後の2002年に、鐘の所在・運用実態調査、寺町周辺地域の騒音レベル測定、住民意識調査を研究室で実施した。それから15年後の現在にこれらはどのように変化したのだろうか。多面的に確認・比較することで、新たな問題点を発見することが本研究の目的である。今回の調査は以下の4つからなる。調査1 鐘音(しょうおん)愛好会へのヒアリング調査 2 寺町台寺活協議会に所属する寺院へのヒアリング調査 3 梵鐘を所有する寺院へのヒアリング調査 4 中学校生徒と保護者へのアンケート調査では、音風景100選を知らない、あるいは鐘の音を聞いたことがない地域住民が多数存在した。その一方、鐘の音を保全して行きたいという願望を持っている人は全体の約90%を占めている。鐘の音を知り、触れることで、認知度を向上させることが期待できる。時間をかけて継続させることで、寺町寺院群の音風景の保全とまちの風景の創出につながる。PTA活動や学校教育の総合学習などを活用した郷土愛を育む試みや、鐘音愛好会との協働による鐘撞きイベントを提案して行きたい。

#### ◇第4報告

都市を読む行為としてのサウンドスケープ・プロジェクト事例紹介

報告者：鷺野宏（都市楽師プロジェクト）

「さいたまトリエンナーレ2016」に関連して、鷺野が主宰する「都市楽師プロジェクト」が企画したアートプロジェクト「オオミヤ・サウンドスケープ」を中心に、サウンドスケープの考え方を生かしたアートによる「まちづかい」やワークショップ事例を紹介する。

#### ◇第5報告

携帯型音楽プレイヤーの使用実態と「気づきのデザイン」の効果

報告者：鶴田(濱村)真理子（宇都宮大学）

近年、携帯型音楽プレイヤーや、音楽再生機能を有するスマートフォンが広く普及している。しかし、音楽ばかりに耳を傾けることによって、一般的に好まれるであろう鳥の鳴き声などの自然環境音に対する興味、関心が低下し、それらの音が不要な音、すなわち「騒音」として捉えられてしまう危険性もある。そこで、携帯型音楽プレイヤーの使用実態調査を行い、その結果を分析した。

大学生147名を対象に行ったアンケート調査の結果、携帯型音楽プレイヤーの所有率は約99%であった。音楽聴取は「気分転換」などのポジティブな理由だけでなく、「周囲のうるさを緩和するため」などのネガティブな理由でも行われていた。音楽聴取時に自動車と接触しそうになるなど、危険に遭遇した経験がある使用者も約15%存在した。音楽聴取時に自然環境音を「うるさ

い」と感じ、周囲の音に対する興味関心の低下を自覚している使用者の存在も明らかになった。

多重応答分析の結果、ネガティブな理由での音楽聴取や、自然環境をうるさいと感じる、周囲の音への興味関心の低下を自覚している、という回答に関連性があることが分かった。これらの回答と携帯型音楽プレイヤーの使用期間が5年から15年という回答にも関連性があり、長期間に渡る携帯型音楽プレイヤーの使用が音楽の聴取傾向に影響を与えた可能性が示された。

このような現状の改善には、「気づきのデザイン」が有効であると考えられる。著者らは過去に携帯型音楽プレイヤーの使用者に対し、音楽を聞かずに屋外を歩行する機会を設ける実験を行った。さらに、ハイブリッド車などの静音車に搭載されている接近通報音を対象とした気づきのデザイン実験も行った。いずれの実験でも被験者は実験参加後に音楽以外の音に興味を向けることの重要さや、周囲の音に対する興味、関心の変化を報告した。携帯型音楽プレイヤーの使用者に対する周囲の音への意識の向け方の改善を今後も継続して図る必要があると考えられる。

#### ◇第6報告

小学校2年生の音探し 教科教育とインクルーシブ教育への可能性

報告者：鈴木秀樹・佐藤牧子（東京学芸大学附属小金井小学校）

公教育が学習指導要領に則って行われているのは自明のことであるが、その中にサウンド・エデュケーションは、位置づけられていない。「サウンド・エデュケーション的」なものが例えば音楽科などに含まれてはいるが、それは各々の教科の考えから導き出された結果、書かれたものであって、サウンドスケープの思想とはおそらく関係がないものである。

したがって、サウンド・エデュケーションを小学校の教育課程の中で行おうとすれば、総合的学習の時間くらいしか枠はない。しかし、総合的学習の時間も地域連携で使われたり、英語やプログラミング教育等で取られてしまうことが多く、サウンド・エデュケーションを取り入れた授業の実現可能性が高いとは言えない。

では、どうすれば小学校においてサウンド・エデュケーションを実践することができるだろうか。筆者らは、特別の時間枠を使うのではなく、既存教科の中での可能性を探ることを考えた。そこで、既存教科の学習を進めつつサウンド・エデュケーションを実践する単元が教科書に含まれていないかを探した結果、小学校2年国語（教育出版）で「音をあらわす言葉、ようすをあらわす言葉」という単元があり、ここでならサウンド・エデュケーションを学習に取り入れられるのでは無いかと考え、授業実践を行った。

結果、小学校2年生においても十分に音に耳を傾ける活動が成立すること、国語の学習にサウンド・エデュケーションを組み込める可能性があることを確認することができた。また、サウンド・エデュケーションを体験することは、発達段階にある小学生が感性を醸成させていく上で大きな意味があると考えているが、それに加えて発達障害を抱えた児童への支援の手立てとしても可能性があることを見出すことができた。

#### ◇第7報告

「うみなりとなり」の制作からみるフィールド録音の可能性

報告者：柳沢英輔（同志社大学文化情報学部）・岩田茉莉江（音風景研究家）

「うみなりとなり」は柳沢英輔と岩田茉莉江が南大東島でのフィールドワークに基づき制作した音の作品（CD+音絵冊子）である。フィールド録音作品の多くは、外部者である録音作家がその土地の音風景を録音し、それをあるコンセプトに従って編集し、音響作品として再構成したも

のである。しかし、そうした作品には、その土地に住む人々の視点が抜け落ちていることが少なくない。本作品は、まず島の人々がどのような音を大切に聴いているのかを明らかにしつつ、それらの音を録音するという制作プロセスをとった。作業の役割分担として、柳沢が録音を、岩田がその場の音を聴きながら絵（イメージ）を描き、聞き取りは2人で進めていった。聞き取り調査の内容は、CDのブックレットに「島人の言葉」として入れるとともに、特定のトラックにおいて島人との会話を入れ込み、音がフェードインして始まるなどの工夫を行った。また報告者自身がフィールドワークの中で見つけた音、島人にとって馴染みがないだろう音もCDに収録した。

フィールドワークから見えてきたのは島人の音を聴く感覚の鋭さである。例えば、南大東島は台風の通り道にあるため、台風の時季には身体全体を揺さぶるような「海鳴り」が聞こえてくる。漁師は「海鳴り」の音が聞こえると、台風がもうすぐくることが分かるという。またトタン屋根に当たる雨の音を好きな音として挙げる島人が多かったが、近年では、断熱材の使用や、トタン屋根の家自体の減少のために、そうした音が失われつつあることが分かった。本発表では、「うみなりとなり」の制作意図・プロセスについて、音源、録音・編集・公開手法とともに紹介し、そこからフィールド録音が学術や地域社会にどのように貢献しうるかを考えたい。発表の最後に、島で撮影した島人の語りを編集した映像を上映する。